

専門家会議の意見書の問題点について。

星 正治

細かい点は多々ありましたが、本質的なことを下記に指摘しておきます。

1. 一番問題としたいと思いますのは、外部被曝線量の計算です。アメリカのデータを使っていますが、これは太平洋にまばらに置いた測定器の測定結果です。

問題なのは、放射能の雲が流れてきて被ばくした場合には狭い範囲が被ばくします。これはホットスポットとなりそれは測定結果には出てきません。例えば p 53 の図では緯度経度で表していますが、各四角は 1 度角です。すなわち 111km の四角です。フォールアウトの雨は、数 100 メートルや数キロメートルの狭い領域です。これを平均したような 111km の四角のデータを使ってホットスポットは計算できません。大瀧先生は実際に同様なデータに基づき同様な計算をされました。結果は同様にすべての船で数ミリシーベルト以下でした。そして、私たちがこの方法を使ってはいけないと結論したのは、第 5 福竜丸で計算しましたが、それも数ミリシーベルト以下(0.08mSv)のレベルでした。第 5 福竜丸では 1600 ~7000 シーベルトとされています。すなわち数千ミリシーベルト被ばくしていることが明らかなのに、この計算では数ミリシーベルト以下となります。唯一の実測がある第 5 福竜丸が、まったく再現できないような計算方式を使っては嘘になりますし、使ってはいけません。内部被曝などもこのデータを使えば同様です。

2. それから 2 ページ下の最後の行ですが、「放射線による健康影響が現れる程度の被ばくがあった事を示す結果は確認できなかった。」とあります。同様な表現はいろいろな場所にあります。非常に曖昧です。健康影響が現れる程度は 100mGy (=100mSv)は皆様認められていますと思います。わたしは 100mGy を超えることがわかれば良いと考えて研究を進めました。放影研の歯や染色体のデータでも大きなばらつきがあると示されていますが、その通りです。現に放影研ではそれを使って議論しています。今回の歯や染色体のデータもそのばらつきの中にあります。十分 100mGy を超えていた船員の方があったといえれば良いと思います。

はじめの「」のところは、「放射線による健康影響があるとされる 100mSv を十分に超えていた船員の方がいた。」と表現すべきと思います。

別の言い方をしますと、彼らの論理では 10 の内 1 がだめだから全部だめと言う論理です。私は 10 の内 5(3 でも良い)が超えていたら船員の方を救済すべきと思います。

3. その他、内部被ばくは放射性の微粒子による被ばくが考えられます。放射性の微粒子による被ばくでは近傍の細胞が大きく損傷し平均的な外部被ばくとはまったく異なります。そして、最近の動物実験では肺胞の損傷が外部被ばくに比べて 20 倍以上被害が大きいとの

結果が出ています。

4. このように、彼らは私たちのデータがだめだと批判していますが、自分たちこそ使ったデータを真摯に見つめ、まずは使えるかどうかを判断すべきだと思います。使えないデータや方法で計算して議論しても無意味なだけでなく誤解を与えることになります。

